

ことばによる ドメスティック・バイオレンスの実態 ー草加市の調査からー

遠藤 織枝

1. はじめに一問題のありか

2001年4月に制定されたDV防止法（正式には「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」）が、2004年12月の改正に続いて本年2007年7月に再改正された。

『朝日新聞』（07.9.11）は、「今年7月の改正では、身体的暴力に加え、生命などに対する脅迫も保護命令の対象に含まれた。加害者からの夜間の電話やメール、著しく乱暴な言動も禁止される。」と記している。従来の肉体的家庭内暴力のほかに、ことばの暴力も保護命令の対象になったのである。その言葉の例として、『毎日新聞』（07.8.26）は次のような事例を挙げている。

「『文句があるなら言ってみろ！』横浜市在住の男性公務員(43)は、結婚以来妻の家事に文句をつけては怒鳴り散らした。……ただ、『殴れば妻を失う』と手は上げなかった。……『暴力』は殴るけるなどだけではない。改正法では、言葉の暴力も保護命令の対象になった。」

『朝日新聞』が「著しく乱暴な言動」とやや抽象的に書くのに対して、『毎日新聞』はより具体的に記している。このように「ことばの暴力」が防止法に加えられる、つまり法律の対象になるという事実は、実態が無視できないまでに広がり、被害を受けている人が多く存在することが前提にあると考えられる。その事実を減らし、被害をなくすためにはどうすればいいのか。対策を講じるにしても、防止するにしてもその実態を把握しなければならない。

遠藤は、2003年5月12日の『毎日新聞』の「怒鳴らないで」の投書をきっかけにして、その投書群とそれをまとめた本『お父さん、怒鳴らないで』（毎日新聞社2003）を基に、「怒鳴られる」人や、「怒鳴る」人、「怒鳴る」理由、その処置などについて調査した⁽¹⁾。

その結果、怒鳴られる人のほとんどが女性であり、怒鳴られる生活が30年40年と続く女性がいることが判明した。しかし、これらは投書という、自ら問題意識を持ち、誰かに訴えることを目的とする文章群による調査と分析であった。実際社会では投書などの手段をとらない人の方がはるかに多い。そのような一般の人々の中での「ことばと暴力」の実態を知りたいと考えていた。

それが、今回幸いにも、文教大学人間科学部の関井友子準教授・大塚明子準教授の指導と協力のもとに、本格的な調査を行うことが出来た。ここにその一部を報告する。

2. 調査の目的と方法

今回の調査は一般地域住民を対象に、ことばを中心とするドメスティック・バイオレンス（DV）の実態を把握することを目的としている。これまでのDV研究や、その対策を講じる面などでは身体的な暴力が中心に扱われてきた。それは身体暴力の被害が直截的でその対応・援助が緊急の課題であるという理由に他ならない。ことばを中心とした精神的暴力は顕在化しにくいため、また身体的暴力ほどの切迫した状況として把握されないために、対処の対象にされてこなかった。より隠微になり屈折して複雑化し、被害者にとっては身体的な暴力と軽重のつけられない深刻さであり、また、そこから脱するための方策や解決方法を緊急に求められている点においても、全く両者は同様であるにもかかわらずである。そこで、ことばによる暴力のその実態を把握し、対応・対策を講じる必要があるのではないかという問題意識に基づき、今回の調査を計画した。特に言葉はコミュニケーション手段であり、DV対応において二次被害を引き起こすことも指摘されている。本調査の結果は行政などの相談窓口において活用され、今後のDV対策への貢献が期待されるものである。

3. 調査の概要

3.1 調査対象者

対象は埼玉県草加市在住の満20歳以上の市民で、調査は草加市役所総合政

策部人権共生課との共催で実施した。住民基本台帳から年代別、性別に2000人を無作為に抽出し、2007年3月17日～3月31日に自計式郵送調査⁽²⁾で行った。回答者は560名で回収率は28%であった。本調査では属性については・職業・学齢などを尋ね、設問の家庭内でのコミュニケーションについても、その対処の仕方などについても設問を設けているが、本報告では、属性については、年代別と性別の人数、設問については、「ことばと暴力」の「ことば」を中心とする項目についてだけを報告する。

調査対象者の性別年齢別構成は（表1）のとおりである。

（表1）性別年代別対象人数 (人)

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	計
女性	148	224	144	176	174	134	1000
男性	153	247	163	171	162	104	1000

調査対象者全体の性別比率は（表2）のとおり。

（表2）性別回答者人数

女性	男性	合計
313 (56.0%)	246 (44.0)	559 (100.0)

性別は女性の比率が若干高く、56.0%、男性が44.0%となっている。

回答者の年齢は、（表3）に示すとおり、60歳代が最も多く、24.4%で、次に30歳代が19.4%、50歳代が17.9%、40歳代が15.4%、70歳代が14.7%、最も少なかったのが20歳代で8.2%となり、本調査の対象者は比較的高年齢層が中心となっている。

（表3）年齢別回答者人数

20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
46 (8.2%)	108 (19.4)	86 (15.4)	100 (17.9)	136 (24.4)	82 (14.7)	558 (100) ⁽³⁾

3.2 実態分析—家庭内でのことばの暴力「どなる」「どなられる」—

3.2-A「ことばの暴力」の加害者として

1. で述べたように、「どなる」「どなられる」が家庭内での「ことばの暴力」の具体例と考えられるので、先ず、「ことばの暴力」の加害者としての実態を知るために、以下のような質問をした。

家庭内のコミュニケーションで、「どなる」などの経験についておたずねします。

問3 これまでに、あなたは家族に次のようなことをした経験がありますか。「ア たびたびあった」「イ 数回あった」「ウ まったくなかった」から選び、当てはまる記号に○をつけてください。

ここでは、家庭内でだれかに「どなる」経験の有無を尋ねている。経験については以下のような回答が得られた。

(表4) 「どなる」経験

	たびたびあった	数回あった	まったくなかった	合計
どなる	88(16.2%)	268(49.3%)	188(34.6%)	544(100.1%)

「どなる」ことが「たびたびあった」「数回あった」人は65.5%である。これを性別でみると(表5)のようになる。

(表5) 「どなる」経験 性別

	たびたびあった	数回あった	まったくなかった	合計
女性	49(16.2%)	148(48.8%)	106(35.0%)	303(100%)
男性	39(16.2%)	120(49.8%)	82(34.0%)	241(100%)

「どなる」経験が「たびたびあった」「数回あった」女性が65.0%で、男性が66.0%、「まったくなかった」女性が35.0%で、男性が34.0%。どちらも1%ずつの差で、ある方とない方を合わせた差が2%である。「どなる」経験の有無では性別による差はほとんどみられない。

「どなる」経験が「たびたびあった」「数回あった」と答えたのは356人(女

性197人、男性159人)で、その人々を対象にして、その相手を尋ねた。

問4 問3で「どなる」ことが「ア たびたびあった」「イ 数回あった」と答えた方におたずねします。その相手は誰でしたか。

として「夫・妻」「親」「子ども」「祖父母」「きょうだい」の中からいくつでも選んでもらった。

その結果は(表6)であった。(複数回答)。

(表6)「どなる」相手 全体

	夫・妻	親	子ども	祖父母	きょうだい	合計
どなる相手	180(50.6%)	60(16.9%)	215(60.4%)	1(0.3%)	39(11.0%)	356人

「どなる」相手は「子ども」に対してが最も多く60.4%で、次に「夫・妻」の配偶者50.6%となっている。これを性別にみると(表7)のようになる。

(表7)「どなる」相手 性別

	夫・妻	親	子ども	祖父母	きょうだい	合計
女性	79(40.1%)	31(15.7%)	133(67.5%)	1(0.5%)	21(10.6%)	197人
男性	101(63.5%)	29(18.2%)	82(51.6%)	0	18(11.3%)	159人

全体では「どなる」相手は子どもがもつとも多かったが、性別では様相が異なる。女性では「どなった」相手の多い順に「子ども・夫・親・きょうだい」となっているが、男性では、「妻・子ども・親・きょうだい」の順になっている。女性が子どもをどなると同じくらいの比率で男性は妻に「どなっている」のである。

「どなる」相手が最も多いのは夫から妻へ、妻から子どもへと、夫>妻>子どものように図式化される。「どなる」ことができるのは、力関係で優位に立つものだから、家庭内での力関係を示すことにもなる。

次に、どんなことばで「どなる」かをきいている。

問5 どのような言葉で「どなる」「ののしる」ことがありましたか。次の

中から当てはまる番号に○をつけてください。(○はいくつでも)

- 1 「このヤロー」 2 「グズ」「早くしろ」 3 「役立たず」
 4 「バカ」 5 「うるさい」「だまれ」 6 「ブス」「ハゲ」「デブ」
 7 「文句があつたらもっと稼いでから言え」
 8 「だれのおかげで生活できると(誰が食べさせていると)思っているんだ」
 9 その他(具体的に)

この間で得られた結果を性別にし、多い順に並べ替えて以下の(表8)にまとめる。

(表8) 「どなったことば」

女性		男性	
1	うるさい・だまれ 76(32.3%)	1	うるさい・だまれ 105 (40.5%)
2	グズ・早くしろ 52(22.1%)	2	バカ 52 (20.1%)
3	バカ 50(21.3%)	3	グズ・早くしろ 34 (13.1%)
4	誰が食べさせている 17(7.2%)	4	このヤロー 28 (10.8%)
5	役立たず 15(6.4%)	5	誰が食べさせている 20 (7.7%)
6	このヤロー 11(4.7%)	6	役立たず 7 (2.7%)
7	ブス・ハゲ・デブ 7(3.0%)	6	ブス・ハゲ・デブ 7 (2.7%)
7	稼いでからいえ 7(3.0%)	8	稼いでからいえ 6 (2.3%)
	235 (100.0)		259 (99.9)

「どなる」「ののしる」ことのあることばをきいているが、ここでは「どなる」「ののしる」の語義的相違を無視して併記しているだけなので、「どなった」ことばとして一括して集計している。選択肢で出したものは、文法的には、「うるさい」「バカ」などは1語の単位、「このヤロー」は連体詞＋名詞で句の単位、「早くしろ」は副詞＋動詞で文の単位と、それぞれ単位は異なるが、一括して「ことば」として扱う。また選択肢は、「バカ」のように1語のもの、「うるさい・黙れ」のように2語のもの、「稼いでからいえ」

のように文章のものなど、いろいろなので、数量化する際はそれぞれ各選択肢を1つの「語群」として数える。

「どなった」ことばの総計は女性が選択肢で235語群、その他の自由記述が45例で計280語群・例、男性が選択肢259語群、自由記述が26例、計285語群・例である。問3での「どなった経験」のある人で単純にその頻度を計算すると、女性が1.43語群・例、男性が1.80語群・例となり、一人あたり「どなった」語群・例は男性のほうが多い。つまり、男性の方が多くの言い方でどなっていることになる。

選択肢から選んだもので「どなった」ことばで一番多いのは男女とも「うるさい・だまれ」であるが、全体の中での比率は男性40.5%に対して、女性は32.3%である。そのほかに男女の差が開いているのは「このヤロー」で、男性10.8%に対して女性は4.7%と、女性は男性の半数以下である。「バカ」「グズ・早くしろ」や「ブス・ハゲ・デブ」「稼いでからいえ」は男女の差が少ない。

選択肢9の「その他」で自由に記述されたものは、具体的に「どなった」ことばの例数としては女性が45例、男性が26例であった。そのことばをダニエル・ヴァンダーヴェーケン（1997）を参考にしながら分類してみる。「早くしろ」のようなものを「命令型」、「うそをつくな」のようなものを「禁止型」、「バカ・うるさい」などを「断言型」、「しっかりして・いいかげんにして」などを「要求型」、「誰が食べさせている」のようなものを「疑問・咎め型」とする。この5つの型を「命令・禁止型」「断言型」「要求型」「疑問・咎め型」の4つに整理して以下自由記述の語群を分類する。

似た表現でも「いい加減にして」は「要求型」になり、「いい加減にしないさい」は「命令型」に分類される。「どなる」言語行動の強弱からみると、「命令・禁止」>「断言」>「要求」>「疑問・咎め」の順で強さは減ってきている。ただし、「命令」の「早くしろ」と断言の「バカ」とどちらが強いかは、一概には言えない。その時の話者の声の大きさ、表情の厳しさ、身体的行為の関わりなどで、表現の強弱は影響されるからである。

そうではあるが、断言の「バカ」と、疑問形の「バカじゃない？」とを比

較すれば、発話行為としては断言の「バカ」の方が強いとはいえるので、アンケートでは区別できない音声の強弱や身体的条件を除いて言語形式だけで、判断できる範囲で分析を行うことにする。

自由記述の表現別類型

命令型・禁止型	女性	泣くのをやめなさい、嘘をつくな、など	8例
	男性	言うことをきけ、早く寝ろ、など	7
断言型	女性	しつこい、もう何もしてやらない、など	11
	男性	バカヤロー、バカタレ、クソババア、など	9
要求型	女性	いいかげんにして、しっかりして、など	18
	男性	いいかげんにして、ちゃんとやって、など	3
疑問・咎め型	女性	それでいいと思っているの、何様だと思っ てるの、など	8
	男性	何やってんだよ、同じくらい稼げるのか、など	7

ここで、わかるのは、「要求型」が女性に多いことである。男性も同じ表現を使わないわけではないが、女性の6分の1の頻度である。自由記述で女性が「どなった」ことばで一番多いのが「いい加減にして」なのである。自分に不都合な行為を相手がしたときに「やめろ」というか「いいかげんにして」というかを、比較すれば、「やめろ」は直接的で強い表現であり、後者の方はより間接的で、穏やかな表現である。

他の型では数量的な差はあまりないが、ことば自体を見ると、相異があることがわかる。「断言型」でみると、男性は「バカヤロー・クソババア」のように、単語を投げつける罵倒語となっているが、女性は「もう何もしてやらない・アンタに言われたくない!」のような、文の単位で「どなって」しているのである。一般に音節数や文の長さは、丁寧度に比例するので、女性のほうはより「丁寧」に「どなり」、男性の方がストレートに「どなる」ことになり、怒りや非難の表現効果は男性の方が強くなっている。

「命令・禁止型」でも数的な差はあまりないが、女性には「泣くのをやめなさい・いいかげんにしなさい」のような丁寧語の命令表現がある。男性には

この種のものはなく、すべて「呼ばれたらすぐ来い・言うことをきけ」のような直接的な命令である。女性の方が、命令形でも丁寧な方を選んでいるのである。

3. 2-B「ことばの暴力」の被害者として

ここではだれかに「どなられる」、つまり被害経験としての「どなられる」の実態をみるために、以下のような質問をしている。

家庭内のコミュニケーションで、「どなられる」などの経験についておたずねします。

問6 これまでに、あなたは家族からに次のようなことをされた経験がありますか。「ア たびたびあった」「イ 数回あった」「ウ まったくなかった」から選び、当てはまる記号に○をつけてください。

「どなられる」経験に対しての回答結果が(表9)である。「どなられる」経験は45.0%であり、「どなる」経験よりも少ない。

(表9)「どなられる」経験 全体

	たびたびあった	数回あった	まったくなかった	合計
1 どなられる	49(9.7%)	179(35.3)	279(55.0)	507(100.0)

次に「どなられる」経験を性別で見ると、(表10)のようになる。

(表10)「どなられる」経験 性別

	たびたびあった	数回あった	まったくなかった	合計
女性	35(12.0%)	107(36.6)	150(51.4)	292(100.0)
男性	14(6.5%)	72(33.5)	129(60.0)	215(100.0)

「どなる」経験では性差はあまりなかったが、「どなられる」経験では女性の方が多くなっている。すなわち、女性で「たびたびあった」「数回あった」のは48.6%で、ほぼ半数であるのに対して男性は40.0%と、女性より8.6%少

ない。

「どなられる」経験が「たびたびあった」「数回あった」と答えたのは228人(女性142人、男性86人)で、次に、その人々を対象にして、その相手を尋ねた。

問7 問6で「どなられる」ことが「ア たびたびあった」「イ 数回あった」と答えた方におたずねします。その相手は誰でしたか。

として「夫・妻」「親」「子ども」「祖父母」「きょうだい」の中からいくつか選んでもらった。その結果は(表11)であった。(複数回答)。

(表11)「どなられる」相手 全体

夫・妻	親	子ども	祖父母	きょうだい	合計
135(59.2%)	89(39.0)	23(10.1)	2(0.9)	25(11.0)	228人

夫か妻から「どなられる」のが最も多く、親から、兄弟から・子どもからと続く。次に「どなられる」際の相手を性別で見ると(表12)になる。

(表12)「どなられる」相手 性別

	夫・妻	親	子ども	祖父母	きょうだい	合計
女性	89(62.7%)	51(35.9%)	17(12.0%)	2(1.4%)	15(10.6%)	142人
男性	46(53.5%)	38(44.2%)	6(7.0%)	0	10(11.6%)	86人

女性も男性も配偶者から「どなられる」のが最も多いが、女性が夫から「どなられる」のは男性が妻からの場合より約10%多くなっている。

次に、どんなことばで「どなられた」かをきいている。

問8 問7「ア 夫・妻」と答えた方におたずねします。どのような言葉で「どなられる」「ののしられる」ことがありましたか。次の中から当てはまるすべての番号に○をつけてください。(○はいくつでも)

- 1 「このヤロー」 2 「グズ」「早くしろ」 3 「役立たず」
4 「バカ」 5 「うるさい」「だまれ」 6 「ブス」「ハゲ」「デブ」

- 7 「文句があったらもっと稼いでから言え」
- 8 「だれのおかげで生活できると（誰が食べさせていると）思っているんだ」
- 9 「だれのおかげで働けてるの」
- 9 その他（具体的に）

問5の加害者の際は「どなる」相手を限定しなかったが、ここでは「女性が夫からどなられる」「男性が妻からどなられる」場合に限定してその際のことばを尋ねている。（表13）

（表13）「どなられる」ことば

	女性			男性	
1	うるさい・だまれ	50(34.2%)	1	うるさい・だまれ	17(26.2%)
2	誰が食べさせている	27(18.5%)	2	バカ	16(24.6%)
3	バカ	25(17.1%)	3	誰のおかげで働けている	10(15.4%)
4	グズ・早くしろ	15(10.3%)	4	役立たず	7(10.7%)
5	このヤロー	14(9.6%)	5	稼いでからいえ	5(7.7%)
6	役立たず	5(3.4%)	6	このヤロー	4(6.2%)
6	稼いでからいえ	5(3.4%)	7	グズ・早くしろ	3(4.6%)
8	ブス・ハゲ・デブ	3(2.1%)	8	ブス・ハゲ・デブ	2(3.1%)
9	誰のおかげで働けている	2(1.4%)	9	誰が食べさせている	1(1.5%)
計		146(100.0)			65(100.0)

最も多かった語群は「うるさい・だまれ」で、これは加害者の経験と同様であった。加害者の経験と異なっているのは、「誰のおかげで働けていると（誰が食べさせていると）思っているんだ」が比較的多く言われていることである。

女性が夫に「どなられる」のは「うるさい・だまれ」と、高圧的に言論を封じられるのが最も多い。次は「誰が食べさせている」と、妻を経済的な弱者であることを確認させる表現で、女性の人権をひどく傷つける表現である。

3番目、4番目、5番目までは、「バカ・このヤロー」などと、短く罵倒する表現で、一方的に断言し、強い語調で投げかけられる表現である。

男性が妻から、「どなられる」ことばも、「うるさい・だまれ」が一番多いが、女性の場合より、全体に占める比率は低く、2番目の「バカ」との差が少ない。

3番目の「誰のおかげで働けている」は、夫が外で、いかによく働いて経済的に家族を養っていたとしても夫の力だけで働けるのではないと、妻が夫に妻の力の確認を求めるわけで、おそらく、この表現は、夫が妻に「誰のおかげで食べられているのか」と、妻に弱者の立場を押しつけようとしたその反論として出てきたものであろう。だから、この表現は妻が夫から言われることはほとんどなく、1.4%といちばん低い比率になっている。

選択肢9の「その他」で自由に記述されたもので、「どなられた」ことばとして書かれているものは 女性13例、男性5例である。それを表現の型に分けてまとめると以下ようになる。

命令・禁止型	女性・いいかげんにしろ、ふざけるな、など	3
	男性・なし	0
断言型	女性・間違いでどうしようもない、だらしがない、など	8
	男性・お酒の飲み過ぎ、むかつく、など	3
要求型	女性・なし	0
	男性・少しは手伝ってよ（子どもの面倒）	1
疑問・咎め型	女性・どうして人の話をちゃんと聞かないんだ、これで掃除をしているのか。	2
	男性・もっと考えて行動したらどうなのよ。	1

「命令・禁止型」は女性の側のみ、つまり夫から「どなられた」ことばにのみ見られる。夫は妻から、命令・禁止型で「どなられる」ことがないのである。

「要求型」は男性の側のみ、つまり、夫が妻から「どなられた」場合にのみみられる。「どなられる」ときも男性のほうがより穏やかにされているのである。

表現型で分けてみると、「どなられる」ことばも、妻は夫から、夫が妻から「どなられる」よりも、激しいことばで、単刀直入に「どなられる」ものである。夫は妻から命令・禁止のような強い表現で「どなられる」のではなく、「少しは手伝ってよ」と要求形で「どなり」、しかも「少しは」のような副詞を伴って、表現を和らげている。疑問・咎め型でも、「もっと考えて行動したらどうなのよ」と、副詞「もっと」をとめない、さらに「どうなのよ」と相手に判断を委ねる表現である。

例は少ないが、自由記述でわかるのは、「どなられる」際に、妻の方がより厳しく激しく「どなられ」、夫の方は、より穏やかに「どなられて」いるという性差である。

以上を整理すると以下ようになる。

1. 家庭内では女性も男性も同じ程度に「どなって」いる。
2. 「どなる」相手は、夫→妻→子どもへと力関係の弱い順にその方向が向けられている。
3. 「どなられる」のは男性より女性の方が多い。
4. 「どなる」「どなられる」ことばは、男性のほうが短くストレートなものが多く、女性には長く、丁寧で、穏やかなものがある。

この結果として、今回の調査では、家庭内で「どなる」ことによる、ことばの暴力は確かに存在する、さらに、その被害者は女性のほうに多いことが推定される、と結論づけられるように思う。遠藤(2003)では、「どなる」のは夫、「どなられる」のは妻という結果であったが、この調査が投書に基づいていたためであり、一般市民生活者の中では、そのような単純明確な図式は描けないことがわかった。夫に「どなられて」傷ついているはずの女性が、子どもに多く「どなって」いるのである。弱者への循環が続くかぎり、家庭内でのことばの暴力はなくなるのではないかと、というより深刻な実態も浮き彫りにされてきた。

ことばの面では「バカ・ブス・デブ」のような罵倒する語は、差別語として、マスメディアでは使われなくなっているし、一般社会でも、直接相手に

向かって差別語や罵倒語を投げかけたりすることは、避けられるようになっている。その一方で家庭内では密室だからとして、こうした差別的言動がまかり通っていることも判明した。このことは、人権意識がまだ一部分にしか浸透していないことを物語っている。ことばの暴力も人権侵害であるという認識を広め、人権尊重の意識を家庭内から根づかせることが肝要であろう。

注

- (1) 遠藤織枝 (2003) 「男は怒鳴り、女は怒鳴られる―新聞投書集『お父さん、怒鳴らないで』と新聞記事検索データから」(『ことば』24号 現代日本語研究会 pp. 26-42)
- (2) 被調査者が自分で書き込んで、郵便で返送する方法。
- (3) 全体の総計559と数字が異なるのは、年齢について無記名の人がいたからである。以下の設問の場合にも、無回答者がいて、合計が回答者合計と一致しないことがある。

参考文献

- 遠藤織枝 (2005) 「差別語不快語の60年」(中村明ほか編『表現と文体』明治書院)
- ダニエル・ヴァンダーヴェーケン著久保進監訳(1997) (『意味と発話行為』ひつじ書房)
- 部落解放同盟中央女性対策部(2006)『被差別部落女性アンケート調査報告書』部落解放・人権研究所
- 社団法人北海道ウタリ協会札幌支部、部落解放同盟女性対策部・アプロ女性実態調査プロジェクト・反差別国際運動日本委員会編集『立ち上がりつながらるマイノリティ女性 アイヌ女性・部落女性・在日朝鮮人女性によるアンケート調査報告と提言』反差別国際運動日本委員会 (IMADR-JC) 2007

(えんどう おりえ)